

死亡フラグを回避すると、

毎回エッチする羽目になるのは

どうしてでしょうか？

## 目次

死亡フラグを回避すると、  
毎回エッチする羽目になるのはどうしてでしょうか？

5

番外編 思い出の温泉宿にて……

265

死亡フラグを回避すると、

毎回エッチする羽目になるのは

どうしてでしょう？

## プロローグ

「藤野……さん？」

シャワーを浴びていた萩原恭介は、浴室のドアノブが回った気がして振り向いた。そして言葉を失う。

「萩原課長……今晚は、帰っちゃダメです……」

そこに立っていたのは、この部屋の主で彼の部下の藤野亜耶だ。

彼女は先ほどまで着ていたジャケットを脱ぎ、カッターシャツに落ち着いた色のタイトスカート姿である。

恭介は今日、打ち上げで珍しく飲みすぎた亜耶を彼女のアパートまで送ってきた。そして、部屋の前で酔った彼女を庇って転び、頭から泥だらけになったため、彼女のすすめでシャワーを借りていたのだが――

「あの……藤野さん？」

自分はシャワーを浴びているから当然、全裸だ。驚く恭介に対して、亜耶は躊躇うことなく浴室に足を踏み入れた。

「今帰ったらダメなんです。課長、今夜はここにいてください」

今日はお互い、それなりに酒が入っている。

だが今の彼女の様子を見た限り、この行動は酔っているからというわけではなさそうだ。違和感を覚えた恭介は、じりと一歩浴室の奥に後ずさる。

シャワーをまだ止めていなかったため、温かい湯が恭介に降り注いだ。亜耶は服を着たまま、歩を進める。

「まだ大丈夫、フラグは緑だから。……だから帰っちゃダメ」

「フラグ？ フラグって……？」

「緑だから折れます。赤になったらダメだから。……大丈夫、私にらせてください」

「藤野さん？ 落ち着いて。まずはここを出て……」

恭介はどこにかく彼女を浴室の外に出そうとするが、亜耶は意味のとおらない独り言を呟きながら奥に押しやるように彼の裸の胸に手を押し当てた。

彼女にもシャワーは降り注ぎ、あつという間にカッターシャツを濡らす。白い清楚なシャツは湯に濡れて透け、愛らしい淡いピンクのブラジャーを浮き立たせていた。

濡れたシャツが肌に張り付くと、彼女の胸がかなり豊かなことが見て取れる。華奢な体格とのギャップで、彼女は酷く扇情的に見えた。

「ちよ、ちよっと待ってください」

「ダメです。待てません。課長がいなくなるなんて、私、耐えられませんから」

亜耶の瞳は涙を湛<sup>たた</sup>えている。

ぎよっとして目を見開いている間に彼女はこちらに近づき、恭介を足止めするようにぎゅっと抱き着いてきた。

濡れたスカートに裸の下半身を擦<sup>こす</sup>られ、恭介はズキリと官能的な疼<sup>うず</sup>きを覚える。

「あつ……あの、藤野さん」

「はい……」

名前を呼ぶと、彼女は素直に彼の方に顔を向ける。

シャワーが降り注ぐからだろう、その目がそっと細められた。シャワーで上気した顔で瞼<sup>まぶた</sup>を閉じる様<sup>さま</sup>は、まるでキスを待っているようだ。

ドクドクと甘い痛みを伴って立ちかけている自身の欲望が、理性をさらに遠ざけた。

（そもそも藤野さんは可愛すぎる。なのに……）

こんなシチュエーションでオトコを煽<sup>あお</sup>ったらどうなるのか、知らないのだろうか？

その甘さを責めたいという欲望に任せて、恭介は彼女の唇を奪った。

初めて触れた亜耶の唇は柔らかくて熱っぽい。好意を持っていた人の唇に一度触れてしまえば、あつという間に理性を失う。

恭介は彼女の腰に手を回し、きつく抱き寄せていた。

濡れたシャツ越しに感じる肌は直接触れるよりもどかしく、欲情<sup>あつ</sup>を煽<sup>あお</sup>る。

醒<sup>さ</sup>めかけていたアルコールが、欲望を伴い再び体中を駆け巡る。

（濡れている女は何よりも色っぽいと言っていたのは誰だったか……）

唇を割り舌を深く差しこむと、亜耶は躊躇<sup>ためら</sup>いながらもおずおずと応じた。その物慣れない様子に、一層、歓喜がこみ上げる。

キスだけで甘い吐息<sup>といき</sup>を漏<sup>も</sup>らして縋<sup>すが</sup>りついてくる彼女の重みが、恭介の気持ちさをさらに浮かせる。

「あつ……ん……ああつ……あ」

喘<sup>あえ</sup>ぐたびに透<sup>す</sup>けたシャツの下で、愛らしいピンクのブラに包まれた丸い胸が上下した。透<sup>す</sup>けた肌<sup>あ</sup>がもどかしい。

そう思いながら恭介は彼女のシャツのボタンを外していく。

キスに必死で気づいていないのか抵抗されることもなく、恭介は三つ目のボタンまで外した。

シャツの上からブラのホックを外すと、きつそうに包まれていた胸がまるびでる。白く艶<sup>つや</sup>やかな隆起の頂点では、下着に引っかかるようにして蕾<sup>つぼみ</sup>が恥<sup>は</sup>ずかしげにたたずんでいた。

「なつ……にしているんですか」

ハツと気づいたようにキスから逃<sup>のが</sup>れた亜耶の目元は真っ赤で、瞳は潤<sup>うる</sup>んでいる。狼藉<sup>ろうせき</sup>を叱<sup>しか</sup>るみたいな視線<sup>しんせん</sup>で睨<sup>にら</sup>まれたが、濡れた瞳に却<sup>かえ</sup>って煽<sup>あお</sup>られるばかりだ。

「私<sup>わたし</sup>だけ裸で、貴女<sup>あなた</sup>が服を着ているのはおかしい……」

「えっ？」

全裸の男に抱きしめられていることに、今更気づいたのか、突然彼女が狼狽<sup>ろうた</sup>する。

「あ、あの、違うんです。私、課長を帰すわけにはいかなくて」

口づけの合間に手のひらでたゆむ胸を揉み、指先で桃色の蕾を転がす。たっぷりとした胸の感触は手のひらに心地よさを与え、頂点はあつという間に硬さを増していった。

彼女の言っていることの意味は分からない。だが、それすらどうでもいいほど今は理性が働かないのだ。

とりあえず、理解できたことだけを確かめる。

「私はこれから帰ってはダメなんですよね？」

「あつあつ……そ、です。帰っちゃ……ダメな……ん、ああ……」

眉を寄せ感じている表情で帰るなど止める部下に、恭介は脳裏が真っ赤になるほどの欲情を覚え、その体を浴室の壁に押し付けた。

「……私にこんなことされても、帰るなど貴女は言うんですか……？」

自分らしくないことをしているのは分かっている。

けれど、普段清楚な姿で真面目に仕事をする彼女が自らの腕の中で淫らに乱れる様子に、理性は完全に切れていた。

「はい……帰らないで、ください」

無体なことをされているのに、彼女は素直に頷く。

首首の意味が分かっているのか。ああ……もうどうでもいい。隙があるならつけこむだけだ。こんな風に誘う彼女が悪い。

「感じやすいんですね……もうこんなに硬くして……本当に、藤野さんはどこからどこまで可

愛い」

ふっくりと立ち上がり誘うように硬くなっている頂に舌を這わせると、彼女はヒクヒクと体を震わせる。亜耶はもう頷くこともできずにくったりと浴室の壁にもたれかかり、彼のされたいようにされている。

「あつ……課長……ダメ。ああつ……あんつ」

口では制止しても、体も声も素直に反応している。

「胸が弱いんですか？ だったらもつと弄ってあげましょう」

片側の胸の頂をチュッと吸い上げ舌先でコロコロと転がすと、腰が揺れはじめた。もう一方の胸の頂を親指と人差し指で摘まめば、もう睨むことすらできずに瞳を閉じて、恭介の肩に両手を預け崩れそうな姿勢を支える。

「か……ちよ、も、そこ……ダメなお……」

甘い声が上がると同時に、ぎゅつと彼女の指先に力がこもり、肩に爪が当たる。その微かな痛みすら、恭介を煽ってやまない。

徐々に張り詰めていく豊かな胸を散々揉みたてながら、彼は濡れて脱がしにくくなっているストッキングに爪を引っかけ破いた。

隙間から指を滑りこませ、艶やかな太腿の感触を堪能する。

「私、なんで……こんなことに……あ、ああつ……フラグを折りたかっただけに……」

「……何を言っているんですか？」

「……見えるんです、私」  
「何が？」

そう訊ねつつも、つい指先を進めてしまう。柔らかい臀部の感触に理性は遠ざかるばかりだ。何かおかしいと思うものの、突然の出来事に、もう恭介は欲望を抑えこめなくなっていた。

「やあつ……あ、ああつ、ダメっ」

やわやわと胸と尻を揉みだると、彼女は柔肌をふるふると震わせて、溶けた瞳で恭介を見上げる。

目と目が合った瞬間、彼の滾った血液が一気に下半身へ流れこんだ。

(ああ……もう限界だ)

密かに思っていた女性とこんな僥倖に恵まれるなんて、誰かに騙されているのかもしれない。だとしても、もう止められなかった。

「壁に手をつけてもらってもいいですか？」

半裸の彼女を散々弄んだ後、体勢を変えさせると、亜耶は縋りつくようにして浴室の壁にもたれ掛かる。

腰が恭介の方に突き出された。

その腰を抱いてスカートをまくり上げ、再び破れたストッキングの間から彼女の下着の内側へ指を滑らせた。

そこはシャワーのお湯とは別の、とろりとした潤みを湛えていた。

「ああ……藤野さんはイヤラシイ。こんなに濡らして……」

「あつ……ああつ。ちがう……違うの」

否定する言葉を聞きながら、恭介はぬるりとした蜜を纏った指で堪能するように秘裂を撫でた。

「違っつて……こんなにトロトロに濡らしておきながら？　なのにダメとか違っつとか、嘘を言っつては困りますね」

後ろから抱き寄せて真っ赤になっつている耳元に囁くと、亜耶は力なく顔を左右に振る。

「……こんなこと、するつもりじゃ……」

「ああ……藤野さんがこんなエロいとは思っていませんでした」

「だから、緑の、フラグが……ダメ。課長、ああ……っ」

「そんな可愛い声で啼かれたら……余計煽られる。人の理性を粉々にしておいて、今更ダメと言っつても、もう遅いですよ」

自分でも何を言っつているんだろうと思う。だが、ブレーキがかからない程度には、アルコールが残っつていた。

いや……醒めかけていたアルコールに火をつけたのは、甘い声で啼き、淫らにも自分に向かつて腰を突き出している部下か……

壁に手をついた彼女のはだけたシャツからは、たわわな胸が零れ落ち、誘うように揺れている。スカートをまくり上げ、破られたストッキングと中途半端に露出した丸い臀部。

とろとろに溶けて自らの指を受け入れている熱い蜜壺に、疼痛がするほど硬く滾る自身を受け入

れさせたい。

(……もう……知るか。彼女を抱くこと以外は、どうでもいい)

彼女が入社する前から密かな想いを胸に抱いていた恭介は、熱情に浮かされたように亜耶の体を強く抱きしめたのだった。

## 第一章 それを彼女は『フラグ』と呼ぶ

亜耶が萩原恭介と一夜を共にする一週間前。

「——藤野さん。いつも急な依頼ですみません。それでは来週のイベントのお手伝い、お願いしませぬ」

オフィスで恭介が眼鏡の奥の目を柔らかく細め、彼女に微笑みかけた。

(ああ……萩原課長の笑顔に、今日も癒される……)

その笑みに見惚れて、亜耶は一瞬返答が遅れてしまう。

「……藤野さん？」

「あつはい。分かりました。それでは当日は会場に直行ということですね」

「はい、私も余裕があれば、手伝いに行きます」

慌てて真剣な顔をして、手渡されたイベント資料を確認しながら頷く。恭介がそんな亜耶を見て、ひそかに笑みを深めたことには気づいていない。

「では、後はお願ひします」

その言葉にぺこりと頭を下げて、彼女はそこから立ち去った。



亜耶が勤めている企業は、最近マスコミなどでも話題の有名IT企業だ。

学生時代の友人は、彼女の職場を華やかなところだと思っっているようなのだが、亜耶の所属は総務部総務課。どの会社でもさほど総務の業務内容に差はないだろうし、現実問題、日々、至って地味な作業に追われている。

先ほど亜耶に話しかけていた荻原恭介は、直属の上司であり総務課長である。年齢は三十二歳、独身（ここ大事なところ）。IT企業のわりに幅広い年代の社員が所属するこの会社では、相当早い時期に課長になった人物だ。

社内の情報通の友人早苗によれば、同期ではぶっちぎりトップの出世株らしい。だが、おっとりとしていて見た目が地味なため、一般の女子社員からは、『閑職に回された残念社員』扱いをされていた。

最先端の企業だけにオシャレな人が多い社内で、恭介は目立たないダークスーツ姿で、なんの変哲もない銀縁眼鏡。黒いストレートヘアを整髪料で軽く纏めている。

少し猫背気味なせいで、長身なのに威圧感は全くない。

そんな一見、平々凡々とした雰囲気だが、その実、涼やかな目元とすっと通った鼻筋に形のいい唇という、端正な顔立ちをしていると亜耶は知っていた。

それに……低くて深い声に、丁寧で柔らかな物腰。

（はあ……課長、今日も最高です！）

亜耶は自席で書類を確認している恭介を盗み見て、机の下で小さくこぶしを握りしめた。

彼の容姿と声は、亜耶の好みのドストライクなのだ。それだけでなく、仕事ができるのに、周囲にそれをひけらかさない。それは人間力まで高い証拠だと思ふ。

例えば職場でトラブルがあっても、穏やかに話を聞き、笑みを浮かべて的確な指示を部下たちに出す。声を荒らげて怒っているところなど見たことがない。

亜耶は入社以来ずっと総務課勤務だが、恭介の前の課長はトラブルがあるたびに大さわぎをして社内を走り回り、誰かを名指しで叱りつけるような人物だったのだ。

だから昨年、人事課主任から課長として恭介が異動してきたときは、前課長と同じような人物かもしれないと警戒していた。だが、すぐに彼の穏やかな振る舞いに好感を覚えた。そして仕事ぶりとは人柄に好意を持ち、気づけばすっかり恭介のファンだ。

そんな憧れの人に認めてもらいたいと、彼女は日々の仕事を全力で頑張っていた。

「——それではお疲れさまでした。カンパニー」

翌週。亜耶は営業企画部のイベントの手伝いに駆り出されていた。今は他の総務課メンバーも一緒に恭介主催の打ち上げ中だ。

（か、課長の隣だ……朝のテレビの占いで『今日は運命的な出来事が待っているかも？』なんて言っていたけど……まさか、これじゃないよね？）

同じタイミングで一次会の会場に到着した恭介と亜耶は、隣の席になっている。亜耶はドキドキする胸の鼓動をもてあましながらも、さりげない風を装って座っていた。乾杯のビールに口をつけ

つつ、改めて隣の人の横顔を盗み見る。

彼は喉を鳴らし、美味しそうにビールを飲んでいる。

ネクタイを緩め、ボタンを一つ外したシャツの襟元。

ゆっくりと動く喉仏に男性らしさを感じて、亜耶はドキツとした。

少し捲った袖から見える筋張った手首や、前腕に淡く入る筋肉の影にも男性の色香があり、じわりと熱がこみ上げる。

(あ、ダメ。あんまりガン見しているのがバレたら、嫌がられる……)

そう思った瞬間、恭介が不意に亜耶の方を向いた。

「今日は藤野さんもお疲れ様でした。お客様への対応がとても丁寧で、企画部の方々も本当に喜んでいましたよ」

眼鏡越しに切れ長の瞳を細めてふわりと笑った笑顔が、普段の凛々しさを和らげている。そんな優しい表情で見つめられたのが嬉しすぎて、一気に顔が火照った。

「あれ？ もしかして、ここ、暑いですか？ 空調を少し強くしてもらいましょうか？」

次の瞬間、彼が冷房の効きを確認するように立ち上がる。エアコンの吹き出し口に手を伸ばしながら訊ねられて、亜耶はあわあわと首を横に振った。

(課長……気が回りすぎです)

本当に気遣いのできる人なのだ。

相手が部下だろうが、お偉いさんだろうが、対応に差はない。

「あの……課長こそ忙しいのに会場に来ていただいて助かりました。……ありがとうございます」  
そう言いながらビールをお酌をしようとする、彼は少し照れた笑みを浮かべてグラスを取った。  
「ありがとうございます。藤野さんにお酌してもらおうと、つい飲みすぎそうで危険ですね」

(それって……ちよつといい意味で言ってます?)

そうであつてほしい。

願望まじりの意識で見れば、恭介の目元が仄かに赤い気がする。

(いやいやいや、課長の言うとおりのこの店、暑いのかも。期待なんかしちゃダメ)

そう思いながらも、思わず胸が甘く高鳴ってしまう。

それってどういう意味ですか？ と訊ねたい気持ちを必死に抑えて、亜耶は緊張しながらビールを注ぐ。

「じゃあ、私からも……」

すると即座にお酌を返され、あわててビールを飲んだ。

やっぱりこの部屋、暑いんだ。ビールが冷たくて美味しい。

お酒は飲めないわけではないのに憧れの人の隣で飲むと、普段よりアルコールが回る気がした。

(はあ。眼福だああああ。こんな近距離で、しかも課長のお酌でお酒が飲めるなんて……。幸せすぎてちよつと……テンションあがっちゃいそう)

亜耶は自分の想いを隠して、平然としているフリをする。

だが、恭介はすすめ上手で、亜耶は緊張のせいもあつてハイペースでお酒を飲んでしまう。いつ

の間にか亜耶は泥酔どいすいしていた。

「……課長お。すみません。ここからは一人で戻れますんで。私、ちっとも酔ってませんからああああ」

うっかり飲みすぎた亜耶は、一次会だけで相当酔っぱらっていた。

そのため、明日支社への出張があるので一次会で抜けるという恭介が、足元の怪しい彼女をタクシーで送り届けてくれたのだ。

亜耶がフラフラとアパートの部屋に向かって歩きはじめると、恭介が慌ててタクシートの支払いを済ませ、後を追ってきた。

「藤野さん、大丈夫ですか？ 足取りが怪しいですよ。部屋まで送ります」

「……らいじょうぶ、ですつ。課長は明日早いですよね。もう帰ってくださいーい」

振り返り後ろ向きに歩きながら、ぶんぶんと手を振った瞬間。

「わわっ」

小さな段差に踵かかとを引っかけて、亜耶は背中から倒れそうになる。

「藤野さん、危ないっ」

恭介が引き寄せようと、彼女の腕を引いた。途端、亜耶はバランスを崩して逆に彼女の方に倒れこんでしまう。

突然だったせいかわ、恭介はそれを支えきれずにしりもちをつく。その上に亜耶がのしかかり、一

緒に地面に倒れこんだ。

「藤野さん……大丈夫ですか？ 私も足元が怪しいですね。すみません、少々飲みすぎたかもしれません……」

それなのに恭介は、亜耶の体が地面につかないように支えてくれている。その上、何よりも先に亜耶のことを心配してくれたのだ。

（課長……やっぱ優しい）

一瞬感動した後、状況を確認した亜耶の顔から血の気が引く。

転んだ拍子に道の脇にある植木鉢をひっくり返したせいで、恭介は頭から植木鉢の土を被っていた。亜耶の方は恭介の体の上で、土ぼこりすら浴びていないのに。

「か、課長。あの……すみません。その頭。気持ち悪いですよね。あの……うちに寄ってシャワー浴びていってください。そんな格好で帰すわけにいきませんっ」

綺麗に整っていた恭介の髪は土でドロドロになり、眼鏡まで汚れている。

亜耶は急いで恭介の上から降りると、彼の泥をそっと払う。それでも綺麗にならないと分かるや否や、有無を言わず彼の腕を引っ張って、自分のアパートの部屋に向かった。

「あ、あの藤野さん。……もう私は帰るだけですから、汚れていても……」

「いえ、そういうわけにはいきませんからっ」

玄関の鍵を開けると、部屋に入れようとする。

「あの、ちよつと……藤野さん？」

騒がしくしてしまつたせいだろう、隣の扉が開き、隣人が訝しげにこちらを見る。

「あの、ここだと落ち着かなくて……とにかく中、入ってください」

亜耶が焦つて小声で頼むと、恭介も通路で騒ぐわけにいかないと思つたらしく、玄関に足を踏み入れる。

亜耶はそれを確認するとドアを閉め、彼のスーツの上着を脱がせはじめた。

「ちょ……あの、藤野さん、大丈夫ですか」

「いえ、シャワーを浴びてください。大丈夫ですつ。その間にスーツの汚れは私ができる限り取っておきますのでつ」

完全に酔っぱらっている亜耶が、続いてネクタイに手を掛けて外そうとすると、恭介が彼女の手を止めた。

「わ、分かりました。じゃあシャワーだけ浴びさせてもらいますので、後はお構いなく」

酔っ払いに抵抗するのは無駄だと思つたのか、泥だらけで帰ることを躊躇つたのか、彼は大人しく脱衣所に案内される。扉の向こうに彼の姿が消えると、亜耶はほっとして汚れていた彼のジャケットを持ち、部屋に戻つた。

スーツの汚れを払いブラシを掛けた後、ハンガーにかける。そして、自分の酔いを覚ますためと、せめてものお札の気持ちこめてコーヒーを用意しはじめた。

その時だつた。それが見えたのは――

亜耶はそれを『死亡フラグ』と呼んでいる。

ゲームやアニメなどに、ストーリーが確定する条件という意味をもつ『フラグ』という言葉があるが、亜耶が『フラグ』と呼んでいるそれは、見逃せば親しい人が死亡する印だ。

この『フラグ』が見える能力は、亜耶が物心ついた頃には発現していた。だから本人は不思議には思っていない。

亜耶の実家は今でこそ普通のサラリーマン家庭だが、もともとの血筋をたどると、地元で大きな神社を任されていて、霊能力者を多く輩出していたらしい。

嘘か本当か謎だけれども、中には霊体を違う場所に飛ばしたり時を遡つたりする能力がある人までいたそうだ。

その家系のせいなのか、亜耶には他人の死の予兆が見える。死期が近い人がいると実際の景色に、その人物が死亡する時の情景が重なって見えるのだ。

小さな頃はそれがよく分からなくて、周りの人たちをずいぶんと怯えさせた。そんな亜耶の唯一の理解者は祖母だ。亜耶は祖母にこう訴えかけた。

「見える風景が緑っぽい時は大丈夫なの。でも赤い時はダメ。どうしても絶対に死んじゃうの」

見える景色には二種類ある。緑がかつた景色と、赤がかつた景色だ。

緑のフィルターが掛かっている時は、その未来は確定していないらしく、亜耶のアドバイスで死を回避することができる。

だが赤い景色の時は、どうやっても変えることができなかった。

赤い景色の中にいた優しい曾祖父が亡くなった際、泣きじゃくる幼い亜耶を抱きしめて、祖母は慰めてくれた。

その後、祖母の死亡フラグが見えた時は緑で、映像で原因が分かったので、早めに病院で診察を受けて事なきを得たという経験もある。

「だから、亜耶ちゃんの能力は悪いものじゃないの。きつと結婚して赤ちゃんを産む頃にはなくなるはずよ。ばあちゃんの亡くなった姉ちゃんがそうだったからね」

病室の祖母は、子供の頃と同じように亜耶の頭を撫でてくれたのだ。

そしてその後、フラグを見ることはあまりなくなった。

ところが、今、久しぶりにフラグを見ている。

それは緑のフィルターが掛かった景色だ。

深夜、街灯のほとんどない細い道を歩く恭介。そんな時間に誰も歩いているわけがないと思っていたのであるう、中型トラックがすごいスピードで突っこんで恭介を撥ね飛ばした。慌ててブレーキを掛けるトラック。だが、十数メートル飛んだ恭介は頭からアスファルトに叩きつけられて……（でも、緑……だよね）

見える映像は怖いし、このままだと課長は死んでしまう。

けれど緑のフラグなら、その状況を回避できるのだ。

（課長が……いなくなるなんて絶対嫌。何があってもあの死亡フラグは折らなくちゃ。朝になるま

で足止めしたら、あれは実現しないんだよ……だから……）

そう冷静に判断したつもりだったが、実際は酔っぱらいである。亜耶はその状態で、シャワーを浴びている彼のもとにフラフラと向かったのだった。

\*\*\*

——ぴぴぴ。ぴぴぴ……

いつもどおりの時間にアラームが鳴り、亜耶は目を開けた。次の瞬間、布団の中の自らの格好に目を瞠る。

「……なんで私、裸なの？」

必死に働かない頭を動かす。

昨日は確か、課内の飲み会だった。

（私……昨日、何をしたっけ？）

ゆっくりと昨日のことを思い出す。

そう、飲み会で運よく荻原課長の隣の席に座ることになり、それが嬉しくて随分飲んでしまった記憶がある。

挙句の果てに酔っぱらった亜耶を心配した恭介が、タクシーで送ってくれたのだけど……  
「うわあああああ！」

そこまで思い出すと、亜耶は布団をかぶり頭を抱えた。

その夜の記憶は、それこそ快楽に呑みこまれて朦朧もろろとしている。だが、経緯は理解できた。

恭介に立った死亡フラグを見て、酔った勢いでなんとか止めようと決意し、彼がシャワーを浴びている浴室に乱入した。そしてとにかく外に出させまいと、あんな恥ずかしいことやこんな乱れまくりなことをしてしまったのだ。

「あ……あの、か……課長？」

慌ててあたりを見渡しても、恭介の姿はない。

裸の自分が恥ずかしく、タオルケットで体を隠しながらベッドを出ると、昨日一晚を一緒に（しかも激しく！）、過ごしたはずの人を探した。

（てか、あんなはしたないことしちゃって……私、嫌われた、よね？）

よりによって全裸の恭介を襲ったのだ。痴女ちじよだと非難されても文句は言えない。

「あああ……」

後悔に満ちたため息を零した瞬間、テーブルの上にメモを見つけた。

『昨日はすみませんでした。私が汚してしまった藤野さんの服は後でクリーニングに出してください。代金はこちらで払います。よく寝ているようだったので、申し訳ありませんがそのまま失礼します』

几帳面な文字で書かれた丁寧な言葉。課長の文字だ、と思うと、ぎゅっと抱きしめなくなる。

けれど、メモだけ残して姿が見当たらないのって……もしかして、あんまりいい兆候じゃないの

かも。

「あああ、もう……なんであんなことしちゃったかなあ、私」

——びびび。

その瞬間、二度目のアラームが鳴り、亜耶ははっとした。

「やば、仕事に行かないとっ」

慌てて着替えを済ませて化粧もほどほどに、部屋を飛び出す。

（課長は……確か支社に直行で、今朝はオフィスには来ないはず……）

それが少しだけ救いだ。あんなことがあった後、どんな顔をして彼の前に出たらいいのか分からない。ない。

とりあえず現時点でできることは、可能な限り早く、普段のモードを取り戻すこと。

ちゃんと「送っていただいてありがとうございます」と恭介にお礼を言って、何もなかった顔をする。

それだけを心に誓って亜耶は入社したのだった。

\*\*\*

「亜耶あ。昨日大丈夫だった？」

目立たないようにこっそりと席に着こうと思ったのに、入社直後、亜耶はさっそく早苗に捕

まった。

「あ……うん。ちょっと飲みすぎちゃったけど、大丈夫」

「そっかあ。まあ課長が送っていくって言ったから、みんなはあんまり心配しなかつたけど。あ、課長は今朝こっちに来ないのね」

「行動予定が書かれたホワイトボードを確認すると、早苗はくるつと回転して、再び亜耶の耳に唇を寄せる。

「で？ 課長と何か進展はあった？ 部屋に誘っちゃったりとか、課長に誘われてホテル行っちゃったり……とか？」

その言葉に、亜耶は思わず目を見開く。

「……ってそんなこと、初心な亜耶にできるなら、こんなに苦労してないよね。でもって課長もそういう無茶しそうなタイプじゃないし」

早苗に頭をポンポンと撫でられたのを幸いに、慌てて下を向いてごまかす。

（いや……そう！ 本来ならできないはず。なんだけど……）

送り狼ならぬ送られ狼ばりに、憧れの人を浴室に連れこんであんなことしちゃったとか……仲の良い同僚でもとても言えない。

しかも相手は、堅物で真面目な荻原総務課長だしっ。

「あ、私、メールチェックしないと……」

ぼそぼそと呟きながら亜耶はパソコンを起動して、メールチェックをするふりをした。

「課長も……亜耶のこと、相当気に入っていると思うんだけどなあ……」

肩をすくめた早苗は、そう呟くと自分の席に戻っていく。

メールを見つても物思いにふけていた亜耶には、その呟きは聞こえなかった。

数分後。ふと顔を上げ、亜耶はあたりを確認した。既に早苗も業務を開始している。

ざわざわと人が会話する声と、コーヒーの匂い。いつもどおりの朝だ。

（もう、昨夜のあの映像は浮かばない。ちゃんと課長の緑のフラグは折れたはず。だから大丈夫）  
離席し、届いた新聞をラックに整理しながら、さりげなく三面記事を確認した。当然のことながら恭介の事故の記事はない。

でもあのまま帰宅すれば、彼は今朝には亡くなって、この新聞の三面記事に死亡事故の被害者として載っているはずだったのだ。その風景まで亜耶は見ていた。  
だから必死になったのだけ……

（といっても……なんであんなことになっちゃったのかな。もつと穏当な止め方があったはずなのに。でも……昨日の、課長すこかった……気がする。私、途中から、記憶飛んじやってるけど……）  
浴室でした後は、服を脱がされて、そのままベッドに押し倒された。普段穏やかで優しい人なのに、ああいう時はちよつとSっぽくて、すつごく激しくて……

『……藤野さんがこんなにエロいとは思っていませんでした』

欲望で熱っぽく掠れた声（かす）が脳裏によみがえり、ゾクリと身を震わせる。

乱れる呼吸。可愛いと何度も囁いてくれた声。微かに香るハーバルノート。大きな体に四肢を組み敷かれて、何度も達してしまったこと。

(……人のこと、エロいとかって……っ。エロいのは課長の方、ですからあああああ)

自分の経験値が高くないことを、亜耶は自覚している。  
だから、あれほど感じさせられたこと自体、青天の霹靂、空前絶後の事態だ。

(というか……課長ってば、仕事もできるけど、ベッドでもできる人なんですか?)

いっばいされて……すごく気持ちよか……。って、ああ、何、馬鹿なコト思っ出してるの。落ちつけ。自分。

一度トイレに行つて顔を洗おうと深呼吸する。

昨日のことを一瞬思い出しただけで、平常心ではいられない。思い出しただけで体が疼いて……ぞわぞわした。

(でも課長……本当に大丈夫だった、んだよね?)

トイレに向かう途中で、昨日バスルームに入る前に見えた光景を思い出し、亜耶はふるつと体を震わせた。

あんな怖い映像を見た後だから、大丈夫だと分かっけていても不安だ。

今日、恭介は支社に直行し、社内環境改善のためのヒアリングを行っている。日帰り出張だから戻ってくるのは夕方だろう。

明日には先日行った社内アンケートの結果を恭介に確認してもらわないといけない。

洗面所に行ったものの化粧後の顔を洗うわけにもいかず、亜耶は冷たい水で手を洗う。

(ちゃんと……普通に顔合わせられるのかな……)

鏡に映る自分は顔が赤い以外は、いつもと変わらないように見える。あんな淫らな夜を過ごしたとはとても思えない。

(よし、あれは私の妄想。私の夢。……なかったことにしよう)

パシンと顔を両手で叩いて気合を入れる。

「だけど課長、緑でよかったな……」

色々と恥ずかしいことになってしまったけれど、今朝も恭介が生きていくことができるのが何よりも嬉しい。片思いでも、本当に大好きな人だから……

きつとフラグのことを伝えれば気味悪いと思われる。今までだつて身内以外に信じてもらえなかっためしはない。しかも昨夜はあんなことになってしまったため、今更説明しても嘘だと思われるだろう。逆にもう絶対に言えなくなった気がする。

他に適当な理由をつけてごまかさないといけない。

真面目な恭介のことだ、部下と不適切な関係になったことをきつと申し訳ないと考えている。これ以上、彼に負担を掛けたくない。

というか、恥ずかしくて自分もいたたまれないし……

「とりあえず、笑顔で乗り切る!」

冷え切った両手で頬をぎゅつと包み赤みが引くのを確認してから、亜耶はトイレを出たのだった。



……冷静に考えれば、部下との過ちあやまちを申し訳なく思うような人は、場所をベッドに移してからもなお、何度も抱いたりしないだろうことに……経験値が低くて迂闊うごちな亜耶は全く気づいていなかったのだった。

\*\*\*

「課長……アンケートの集計結果なんです」

翌日。恭介は忙しく社内を動き回っていて、なかなかコンタクトを取れなかった。ようやく顔を合わせる事ができたのは夕方だ。

「あ、ああ。藤野さんに頼んでいたんですね。はい、拝見させていただきます」

一瞬の間があつたものの、いつもどおりふわりと笑みを浮かべた恭介に、亜耶はほっと息をつく。

「はい。確認お願いします。何か問題があれば、声を掛けてください」

それだけ言うと会釈えいせきをして、そそくさと自分の席に戻る。それから視線を上げ、真剣な顔で書類を確認する恭介の様子を盗み見た。

（よかった……いつもどおりの課長だ……）

あんなことをした自分にどういふ態度を取るだろうかと心配したけれど、少なくとも表面上は今までと変わらない。そう思つてホッと安堵あんどのため息を零こぼした瞬間、顔を上げた恭介と視線が合つて

しまった。

「藤野さん？」

呼ばれて慌てて席を立つ。

「何か問題がありましたか？」

「いえ、書類は問題ありません。ありがとうございます。それでこの後、少し付き合っていただけませんか？ 役員会議のために会議室の準備をしないといけないので。あ、もちろん、お忙しいなら他の人に頼みますが」

恭介に申し訳なさそうに訳なすねられて、亜耶は顔を左右に振つた。

「大丈夫です。お手伝いします」

「そう、よかった。じゃあよろしくお願いします」

立ち上がった彼の少し猫背な背中を追いかけて、亜耶は歩きはじめたのだった。

「――机の配置はこれでいいですね」

本来なら、恭介自らがするような仕事ではないのに、退社時間ギリギリだったせいだろう、恭介自身がほとんどの机の移動をやつてしまった。

亜耶は椅子の移動を手伝い、ファイリングされていた書類を机につつ置き、ペットボトルのお茶を準備したくらいだ。

「朝一の会議でしたので、今日のうちに準備をしておきたかったです。手伝っていただいてあり

がとうございました」

丁寧な礼を言われて、小さく笑みを浮かべる。

「いえ全然」

「それに……」

すると恭介はゆっくりと亜耶の側に歩み寄ってきて、彼女の顔を見下ろした。

「この間は……」

そう言いかけて軽く握った手を口元に運び、もう一度目を細める。亜耶は、来た、とばかりに身構えた。

「この間はすみませんでした……」

彼女の緊張に気づいているのかいないのか、恭介は深々と頭を下げる。亜耶は咄嗟とつさになんと返していいのか迷った。

(謝ったつてことは……やっぱり、アレはなかったことにしたいんだよね、きつと)

そう判断すると、シミュレーションどおり、緩く首を傾げる。

「この間つて……私、酷ひどく酔よっぱらつていたみたいで。何か……しでかしましたか？ あ……こちらこそ送つていただいて、すみませんでした」

できる限り間の抜けた顔をしてから、パツと頭を下げてみせる。

いや、本当は心の底から謝りたい気持ちでいっぱいなのだ。その思いで、つい九十度近く頭を下げる。すると恭介は、亜耶の肩を押して顔を上げさせた。

「あの……何も覚えてないんですか？」

亜耶の顔を覗きこんで、驚愕きょうわくしたように訊ねる。

でもここは絶対認めちゃダメなところだ。

(認めたら課長を困らせてしまうし……。自分も色々困つてしまう)

亜耶は必死の笑みを浮かべて頷いた。

「全然。あの……何か、私、やらかしましたか？」

恭介は一瞬何かを言いかけて、口を閉じる。

「……そうですか。こちらこそご迷惑を掛けたようで。いえ、いいんです。それならそれで……」どこか困惑したような笑みを浮かべて小さく息をはいた後、時計を見上げた。

「ああ、もう退社時間を過ぎてしまいましたね。手伝つていただいてありがとうございます。それではお気をつけて」

「は、はい。お疲れさまでした。お先に失礼します」

それだけ言うと、亜耶は小走りに会議室を出ていく。走りながら、恭介が謝るために会議室に連れてきたのだ、と気づいた。

(私つてダメだな。課長に……気遣いばかりさせちゃつて……)

だから、これ以上気を遣わせないためにも、これでよかったのだ、と自分に言い聞かせる。

だが亜耶は、あの日の夜をまるでなかったことにしたことを、どうしようもなく切なく感じていたのだつた。

第二章 フラグを折ろうと思ったたらキスされて……

それから数日は特に問題なく過ぎていった。

恭介は今までと全く変わらない様子で業務を取り仕切り、亜耶も何事もなかったように振る舞い続けている。

(あの夜のことが、夢でも見てみたい)

亜耶はいつもどおりの生活が続くことにホッとしていたが、一方で、ふとあの夜のことを思い出すとゾワゾワと不思議な震えを覚える。加えて、あの夜の出来事が何もなくなってしまうことが切なかった。

「——ちいす。今日から担当が代わります。俺、佐藤尚登さとうのぼとって言います。宜しくお願いします」  
明るい声が響き渡り、亜耶が見ている前で、青年がペコリと頭を下げた。

総務課に挨拶あいさつに来たのは、宅配業者の青年だ。茶色がかつたゆるいウェーブの髪。長い睫毛まつげでぱつちりとした瞳。愛嬌あいぎょうある笑顔。

スタイルが良くて可愛い青年だ。きつとモテるだろう。

(うーん、爽やかだなあ。身長は課長と変わらないくらいあるかな……)

亜耶は目の前の男性を、無意識に恭介と比べる。その途端、青年と視線が合つてにつこり笑いかけられた。慌ててぎこちなく笑みを返す。

「ナオトくんか、よろしくね。てか、さっそくで悪いけど、発送したい荷物があるんだ。亜耶、それ、よろしく」

「あ、これね。はい。じゃあ佐藤さん、お願いします」

「あざーっす。了解っす」

早苗に言われて亜耶が荷物を出そうとすると、尚登はウインクを飛ばしてきた。

「亜耶さんっていうんですか、可愛いっすね。めっちゃ好みです」

(か……軽い)

思わず亜耶はぱちくりと瞬瞬きする。尚登はニヤツと笑みを浮かべた。ペコリと頭を下げ、重そうな荷物をひよいと持ち上げる。

手足が長くて細く見えるのに、意外と筋力はあるらしい。

「でも亜耶さん、きつと彼氏とかいますよね」

「……いや、いませんけど」

「じゃあ、今度デートしてくださいよ」

「えっと……お断りします」

「即答っすか？ マジで？ ……シヨックううう。俺、フラれました」

次の瞬間、まさにしょんぼりといった様子で落ちこむ彼を見て、亜耶はフォローをすべきか迷う。

その時――

「ま、明日も来ますんで、懲りずにまた口説きまゝす。亜耶さん、またね〜」

片手で荷物を担ぎ上げもう一方の手をひらひらと振ると、尚登は総務課ブースを出ていく。

「ナオトくん、イケメンじゃない？ 年下も悪くないかもよ？ 一度ぐらいデートしてあげたら？」

呆然と彼を見送っていた亜耶の横腹を、早苗が肘でつついた。

「……うーん」

「でも、課長とは真逆のタイプだもんね。好みじゃないんでしょ？」

耳元で小さく聞かれて、亜耶は真っ赤になりながらコクコクと頷く。

一瞬視線を感じて顔を上げると、こちらを見ていた恭介と目が合った。

「高橋さん、藤野さん、資料室の整理、お願いしてもいいですか？ 今朝届いた資料を開封して、

棚に並べてもらいたいです」

時計を見ると退社時間まであと一時間だ。

「はい、分かりました。亜耶、今、いける？」

「うん、大丈夫。早苗、今日デートだったよね、ダッシュで済ませた方がよさそうだね」

そう囁き合うと、亜耶達は鍵を取り、資料室へ向かう。

その二人の背中、主に亜耶の背中を恭介が鋭い瞳で見ていることに亜耶は気づいていなかった。

「――てかさ、結局うちの会社、ペーパーレス進んでないよね。データでいいじゃん、データで。」

結局何かあると紙の資料が届いてさ。上層部もなんだかんだと、年寄り多いし。何年か前に来た役員、元銀行のお偉いさんなんだって。ああいう人が紙じゃないとって、言ってるんじゃない？」

「まあ……仕方ないよ。さくつと片付けちゃおう」

なだめるように言ったものの、資料室に積んであった大量の書籍資料に亜耶もうんざりする。

「これ、全部パソコンに登録して整理したら、就業時間内に終わらないよね。私、後やっておくからさ、終業時間になったら、早苗、先に帰りなよ」

そう告げると、早苗は顔の前で祈るみたいに手を合わせた。

「マジで？ ありがと。遅れるとアイツ、機嫌悪いし。今度埋め合わせする」

さつき文句を言っていたのは、彼氏とのデートに遅れたくないだけなのだ。

普段はしっかり者で情報通の早苗にはお世話になりっぱなしだし、と亜耶は資料を手に取る。そして、資料室のデータ管理用のパソコンを立ち上げた。

\*\*\*

「――結構かかったなあ……」

仕事を終えて時計を見上げると、既に七時を回っていた。

その時、資料室の扉が控えめにノックされる。はい、と答えるとドアが開いた。

そこにいたのは資料整理を亜耶に頼んだ恭介だ。

「藤野さん、まだ……残ってたんですか。すみません、って高橋さんは……」

「あ、早苗は今日、用事があったので、私が残りをやっておくことにして先に帰ってもらいました」

「……そうだったんですね。気づかなくてすみません。しかも整理だけでなく登録まで……」

綺麗に並べた資料を見て、恭介は感心したように声を上げる。そのことが嬉しくて、亜耶はっこりと笑みを浮かべた。

「いえ、もう終わりましたから。課長こそ、今日も遅いんですね」

「いえ、私ももう、帰るところです」

恭介がそう言つて机にあつた鍵を手に取り踵を返そうとした瞬間。

「——なんで？」

その後ろ姿に二重写しのように見えたのは、緑のフィルターに彩られた景色だ。

駅のホームに立っている恭介に、ふざけた学生たちがぶつかると。彼は押されてふらつきホームから落ちて、構内に入りこんできた電車の前に……

「ダメです。今、帰っちゃ……」

彼がホームから落ちないようにと思つた亜耶は、咄嗟に恭介の背中に抱きつく。ビクンとその背中が微かに震え、ゆっくりと彼が振り向いた。

「……なんで、ですか？」

亜耶は一節一節を区切り、言葉を紡ぐ。

「あ、あの……ダメ、なんです」

なんて言えればいいだろうか。このまま帰ったら電車に轢かれて死んじゃうからとは、当然言えない。

「……藤野さん、震えていますね……」

そう言われて気づく。

確かに彼のスーツの背中を掴んだ拳が、震えていた。

「……課長に……このまま、帰ってほしくない……んです」

亜耶の言葉に、彼はふうつと深いため息をつく。ゆっくりと振り向き、亜耶と対峙した。

「この前と……一緒ですね。貴女は……ズルい。……さつきはあんな若い子と楽しそうにしていたくせに……」

「あの……ごめんなさい。もう一度……」

彼の言葉は途中から小さくなり、よく聞こえなくなる。内容が気になって訊ねると、いつも見惚れている綺麗な指が亜耶の頤を持ち上げた。

「……あんなに体に教えこんだのに、忘れられるとは予定外でした……」

「……え？」

近づいてくる人の瞳は、艶めいて見える。

吸い寄せられるように、亜耶は意識を奪われた。

「……嫌だったら逃げてください」

「あつ……」

(やだ……なんて……)

拒否する気も起こらないほど、その瞳に捕らわれている。

近づく唇の気配に屈服して、亜耶は目を伏せた。胸がバクバクと激しく高鳴る。呼吸が苦しい。息を吸うことも吐くこともできない。

刹那——

「……本当に、困った、人だ」

吐息と共に甘く掠れた声<sup>なご</sup>が落ち、唇が降ってくる。

ふわりと柔らかい物が唇を覆った。

(うわ……私、今、課長とキス……しちゃってる)

パニックになる頭と、飛び出しそうなほど跳ね上がる心臓。触れ合う唇は温かくて心地がいい。うっとりとして力が抜ける。

(あ……なんか幸せ……)

「……っ」

しばらくして、そっと離れた唇の気配に、亜耶は目を開ける。

目の前の人は眼鏡の奥の瞳を柔らかく細めていた。

そのまま抱き寄せられて、彼の肩のあたりに額<sup>でい</sup>を寄せる。ふわりと漂<sup>たふ</sup>うのは、あの日に繋がる彼の香水の匂いだ。

「……あの、藤野さん？」

けれど声をかけられてハッと視線を上げた先に、先ほどと同じ緑のオーラに包まれた彼の最期の景色が見えた。

(まだ……ダメなんだ……)

フラグは消えていない。もう少し時間を稼いで運命を変える必要がある。

どうしよう。そう思った瞬間、手を伸ばしていた。

左の手のひらが捕らえたのは、彼のうなじ。無意識に顔を引き寄せて、キスを誘うようにそっと目を閉じる。

「……藤野……さん」

「んっ……」

再び触れたキスは、ゆるく開いた唇から舌を差しこまれて、一気に大人なものに変わっていく。力が抜けた体を彼は腕の中にしつかりと捕らえ、亜耶は心も体も浮<sup>みだ</sup>らなキスから逃<sup>のが</sup>れることができなくなった。

口内で互いの舌が触れ合う。それだけでジンと脳まで痺<sup>しび</sup>れる気がする。鼓動が苦しいくらい激しく鳴っている。容赦なく舌を搦<sup>な</sup>め捕<sup>と</sup>られたかと思うと、ちろちろと可動範囲の広い舌が亜耶の口内を責め立てた。

「んっ……んあ……はあっ」

ぞわっと甘い戦慄<sup>せんりつ</sup>が背筋を駆け抜ける。カクンと膝<sup>ひざ</sup>が折れた瞬間、彼が亜耶を引き寄せた。

舌を伝って流れこんでくる恭介の唾液は甘い。

こくりと飲み干すと、褒めるかのように彼は軽く唇を触れ合わせて、指先で優しく頬を撫でた。

「んっ……藤野さんは……本当に可愛い」

一瞬離れた唇から囁かれる蜜のような甘い言葉。頤を支えていた手が口元に伸びて、親指の腹で濡れた唇を撫でられる。

「あはっ……」

そして再び重なる唇。

無機質な資料室内で行われている淫らなキスが、現実のこととは思えない。

何度も角度を変えて貪られ、唇で感じていた痺れがあつという間に体中に広がってゆく。蕩けた体が形を失っていく気がした。

ゆらりと世界が溶けて崩れ去る。

「んっ……大丈夫ですか？」

力が抜けてしまった亜耶を抱いた恭介が唇を離す。濃厚なキスの名残のように、互いの間を銀糸が繋ぐ。恭介はそれを指先で拭うと自らの唇に運び、舐めとった。

「藤野さんは、何処も彼処も、甘い……」

ふっと眼鏡の奥の目を細めて、艶然と微笑む。そのしぐさの色香にあてられて、亜耶は視線を逸らせない。

(課長って……こんな色っぽい人だったんだ。ううん、——違う、私、知ってる……)

目の前にいるのは、あの日の夜、不慣れな亜耶を骨の髄まで貪った肉食獣だ。

「まったく……藤野さんには惑わされてばかりです……」

この人は何を言っているのだろう。惑わせているのは恭介の方だ。

そう思いながら、亜耶が視線を上げると、彼は何かを言いかける。けれど次の瞬間、整っていた自らの髪をぐしゃりと掻き上げた。長めの前髪がはらりと額に落ちる。

「いえ、悪いのは私の方ですね。……一人で立てますか？」

恭介はゆっくりと亜耶から手を離す。

足腰が立たずに崩れ落ちそうになったら、彼にもう一度抱き着けるのにと考えつつ、亜耶はちゃんとその場に立った。

それを見て、彼は困ったようなため息を落とす。

「……もう帰っても構いませんか？」

言葉は柔らかいのに、その意味を考えた亜耶は悲しくなる。引き留めたのは自分で、彼は帰りたいのだ。

もう見えていた緑のフラグは消えている。多分この短い時間で彼の運命は変わり、不幸な事故は防がれた。

「はい……もう大丈夫です」

亜耶は頑張って口角を上げて、笑みを浮かべる。ちゃんと笑えているといいのだけだ。

「——っ」

次の瞬間、大きな手が降りてきて、ふわりと亜耶の髪を撫でた。

「……なんて顔しているんですか。そんな顔をした貴女とこんな密室にいたら……」

彼がスーツのポケットに手を入れる。チャリ、と金属を触れ合わせる音がした。亜耶が持っていた鍵は机の上にあるので、それは多分彼が持ってきた資料室のマスターキーだ。

それを使って何をしようというのか？

「……また、シタクなる……」

ぼそりと呟かれた言葉は、願望による聞き間違いなのかもしれない。

けれど顔を上げた亜耶は、彼の瞳の中に情欲の熱を見つける。

——きゆるるるる。

その時、お腹の音が盛大に鳴った。亜耶はぼつと顔を逸らす。真正面で亜耶の顔を見ていた恭介は、ぷつと噴き出した。

「……す、すみません」

恥ずかしい。なんでこのタイミングでっ。

亜耶は身を縮めて謝る。すると恭介は、尻を下げいつもの優しい上司の顔で、時計を見上げた。

「もう七時半ですね。もう少し、お時間はありますか？ 残業してまで頑張ってくれた藤野さんに夕食をご馳走したいです。このままだと貴女は帰宅するまでに、空腹で倒れてしまうかもしれません」

髪をふわりと撫でる指は、やっぱり温かくて……

「あっ……」

彼の手が亜耶の長い髪を滑り下りて背中を包む。気が付くと亜耶は、大きな腕の中に再び抱き寄せられていた。

「実は私も飢えが酷くて……食べてはいけないものを食べないように必死なんです」

苦笑まじりなのに艶めいた言葉を聞きつつ、鼻腔で心地よい香りを捉える。

(限界。ダメ……も、溶けそう)

抱きしめられて感じるのは、あの日ベッドの中で嗅いだ清潔なハーバルノートだ。だけどその奥にセクシーな香りが混じっている。

抱きしめられただけで、きゅんと体が疼くなんて、生まれて初めての感覚だった。たったこれだけで、淫らな夜の記憶がフィードバックする。

「あの、藤野さん。……何が食べたいですか？」

けれど体が疼いた瞬間、その腕の中から解放された。何事もなかったような雰囲気の話に、亜耶はきよとんと顔を上げる。

「え……えつと……課長は何かお好きなんですか？」

甘い空間は泡沫のように去った。

それでも亜耶は二人きりで食事にいける、あのまま帰ってしまいそうだった彼ともう少し一緒にいられるという嬉しさで、弾んだ声を返す。

「嬉しそうですね。そんなにお腹が空いてたんですか？」



くすつと笑って亜耶をからかうと、恭介はいつもみたい少し思案顔をする。

「……私の好きな物、ですか……。好き嫌いはないですよ。それより残業のご褒美ですから、藤野さんの好きな物を食べに行きましよう……」

恭介に促された亜耶は、資料室を出たのだった。

「——お疲れさまでした」

ふわりと笑みを浮かべる恭介のグラスに、亜耶はそつと自らのグラスを合わせた。

(課長と二人きりで食事なんて夢みたい)

上機嫌な彼女の唇からは笑みが零れて止まらない。

目の前にはプロシユートの盛り合わせと、白身魚のカルパッチョが並んでいる。色鮮やかなグリーンリーフがさらに気持ちをワクワクさせた。

「すみません、私は明日朝が早いのでお酒は飲めませんが……」

合わせたグラスは二人ともペリエだけけれど。

「……いえ、夕食をご一緒できて嬉しいですよ。……あの、お腹空きました。食べてもいいですか？」

亜耶の言葉に、恭介は眼鏡の奥の目を細めて柔らかい表情を浮かべた。

「ええ、私もお腹が空きました。食べましょうか？」

手を合わせていただきますと小声で言う恭介に、亜耶も手を合わせていただきますと返す。恭介はさりげなく盛り合わせになっていた前菜を取り分けてくれた。彼はこんなところまで完璧だ。

「課長つて紳士ですよねえ」

「からかわないでください。実は学生の頃、ホテルのレストランでバイトしていたんですよ」  
思わず褒めると、照れた顔をして笑う。

つい頼まれてもいないのに取り分けてしまうんですと、彼は肩を竦めた。

言われてみればカトラリーの使い方方も慣れている。食事をとる仕草もイメージどおり綺麗で、  
やつぱり見惚れてしまう。

「そうだったんですね。職場でも、いつも仕草が綺麗だなんて思っていて……」

ちよつとだけ頬に熱を感じつつ、亜耶は「実は密かに見惚れてました」と告白する。すると恭介は、困ったように笑った。

でも、どこか嬉しそうにも見える。

その笑顔は控えめで押しつけがましさがなく、恭介への評価は上がるばかりだ。

「藤野さんは学生時代、アルバイトはしていたんですか？」

「……はい……」

言葉を交わしながら、亜耶はそつと目の前の人を見上げた。

きちんとしたスーツ姿にも、優しい表情にも、緊張している自分の言葉をゆつくりと聞いてくれる様子にも、気持ちが安らぐ。

そもそもこちらの気持ちを無視して、グイグイ押してくるタイプの男性が亜耶は苦手なのだ。大人しそうに見られるせいか、その手合いの男性に強引に口説かれることが多く、ほとほと嫌気がさ

している。

(強気で迫<sup>せま</sup>ったらなんとかなるって思われているんだろうな)

でも目の前の素敵な人なら、もう少しグイグイ来てもらっても全然構わない。というか来てほしい。亜耶は憧れの彼とどうやって距離を縮めればいいのか、困っていた。そもそも自分から男性に迫<sup>せま</sup>ったことなどないのだ。

(やっぱり……この間のこと、課長は覚えているんだ、よね)

その上でこうやって誘<sup>い</sup>つてくれることは……嫌<sup>きら</sup>われないのだと信じたい。

でも、今日お酒がなしなのは、酒癖が悪いと思われているせいだろうか？

たっぷりとラグーソースの絡<sup>か</sup>まったリングイネを口に運びながら、そっと恭介を見る。途端、ニコリと笑みを浮かべた彼に、美味<sup>おい</sup>しいですか？ と聞かれた。

「お、美味<sup>おい</sup>しいです……」

一挙手一投足を見守られているみたいで、なんだか恥ずかしい。

どこか甘い視線にドキドキしつつ、食事は進んでいった。

お酒を飲んでいないのだからラストはデザートはデザートを食べてくださいという、すすめ上手の恭介の言葉に甘えて、うっかりジェラートとミニケーキの盛り合わせまで食べる。

「ふああ、美味<sup>おい</sup>しかったです。食べすぎちゃった……」

思わずニコニコと笑顔を向けると、彼も笑い返してくれた。

(課長とデートしたら、こんな幸せな気持ちになるのかなあ……)

ご馳走<sup>ちそう</sup>してくれた恭介に恐縮しながら、亜耶は幸せな気持ちで店を後にしたのだった。

\*\*\*

その晩。

「あああああああつ」

亜耶は自室のベッドの上でうつぶせに寝転がったまま、ジタバタと暴れていた。

「なんだか、すごい、幸せだったなあああ……」

憧れの人のさりげないエスコートは心地よかったし、優しく素敵な笑顔を独り占めできた。亜耶は、とつても幸福な時間を過ごしたのだ。

しかし、ふと思う。

(でも……なんで急にあんなこと……)

資料室で唐突にされたキス。

確かに帰ってほしくないと、彼を引き留めたのは自分だ。でも、なんでああいう雰囲気になったのかは分からない。

ぼすんと枕に顔を落として、今日の記憶を一つ一つ思い出す。

恭介と触れ合った唇、抱きしめてくれた腕とその腕の中で嗅<sup>か</sup>いだ香り。くしゃりと髪を撫<sup>な</sup>でてくれたこと。

(嫌われてはないよね、きつと)

色々なことがあって戸惑とまどってはいるけれど、今はその事実だけで十分だ。

それに……二人きりで過ごした時間。彼が美味おいしそうに食事を食べる綺麗な仕草。亜耶のくだらない話を聞きながら、返してくれる微笑ほほえみ。

もちろんそれらが全て、好きな人にだけくれるものだったら一番いいけれど、もしそうでなかったとしても……

「んー。すつごく幸せだったからいいか」

(課長とデートだもんね。あれはデートだったことに決めた)

明日早苗に、残業のお礼として恭介に食事をご馳走ちそうになったと報告するのを楽しみにして、亜耶はにんまりと眠りにつく。

だが、めつたに立たない死亡フラグが、恭介に関しては短期間に二度も立った異常さに、彼女はまだ気づいていなかった。

\*\*\*

恭介に新しいフラグが立つことなく、数日が平穩に過ぎた。

(課長は今日もカッコいいけど……これから先、どうなるんだろう……)

中途半端に近づいたかと思えば、元に戻ってしまった自分と彼との関係。遊び相手だと思われて

いるのか、それとも一歩進んだ仲に発展しうるのか。

(でもなあ。……ないよね……)

内線電話で打ち合わせしている恭介をじつと見つめていると、ふと彼がこちらを見た。慌てて亜耶は手元の卓上カレンダーに視線を落とす。

あの後も彼は亜耶に対して今までどおり上司として振る舞っており、仕事以外の会話をすることはしない。

だから期待薄だと分かっている。

「あ。あれから一週間か……」

あの飲み会の日の翌日に、備品のチェックをした。一週間経ったので、また備品のチェックをしないといけない。ついでに不足品の発注をかけたおこうと、亜耶は席を立った。

「――あ、藤野さん、備品チェックに行くなら、ついでに営業部によって、二課の山口やまぐちさんにこの書類を渡してきてもらえますか？ 書類不備があるので修正するように、と。本人がいなければ、メモをつけて置いてもらえれば……」

電話を終えた恭介が、A4サイズの封筒を持って歩いてくる。慌てて受け取りにいき、亜耶はにつこりと笑みを返した。

「営業二課の山口さんですね」

「ええ、余計な手間が増えてすみません。よろしくお願いします」

またしても整った彼の顔と、この間触れた唇に視線を向けそうになり、亜耶は慌ててごまかすよ